

## 書評

### Yuko Kikuchi, *Japanese Modernisation and Mingei Theory: Cultural Nationalism and Oriental Orientalism* (London: RoutledgeCurzon, 2004)

柳宗悦は1929~30年にハーヴァード大学で講演を行い、大好評を博したといわれている。西欧の聴衆に訴えかけるだけの射程をもつ民藝理論の国際性を裏付ける逸話だが、なぜかこれまで、そうした国際的な視野から柳の民藝思想を検討する体系的な研究は数少なかった。その先駆的な一例には1983年のエリザベス・フロレの博士論文がある。そこでなお将来の課題として残っていた領分に果敢に挑んだのが、菊池裕子氏の博士論文を基とした、本書 Yuko Kikuchi, *Japanese Modernisation and Mingei Theory* (Routledge-Curzon, 2004) である。

柳思想の国際的な視野を検証することは、同時に当時の西欧社会が正義と任じていた植民地主義に、柳の思想もまた否応なく内属していたことを、容赦なく摘出することになる。後発の植民地国家・日本の帝国主義的施策に織り込まれたさまざまな捩れと柳の足跡とは、どのように同調し、どこで不協和音をきたしていたのか。その抽出が重要な課題となる。

すでに著者は1994年前後に、柳宗悦の朝鮮や台湾に関する著述を批判的に検討する先駆的な論文を英語で発表していた。朝鮮の白磁に民族の悲哀を見る柳の説は、70年代に韓半島で、植民地主義者による家父長的な温情主義として根底的な批判を蒙った。それは柳の初期の情緒的な主観論のみに注目した、偏った批判たるを免れなかった。だが柳はその後、朝鮮での経験を敷衍して、沖縄や台湾でも同様の自説を繰り返す。そこに著者は、欧米の帝国主義の縮小版を東洋で反復した柳の時代的限界を摘出する。これらの批判的検討は、現在に至るまで、英語で入手可能なもっとも周到な分析であり、とりわけ台湾でのその後の民藝の発展に関する知見は、著者の現地調査に裏打ちされ、貴重な貢献をなす。中国東北部、旧満洲地域での外村吉之助らの活動についても、筆者は最新の研究動向に敏感に目配せし、浜田庄司関連の研究文献がこの時代に沈黙していることを見逃さない。

柳の思想を国際的視野から評価するために重要な第2の視点は、周辺の運動との異同の見極めだろう。ともすれば民藝に関する研究は、柳への一方的な賞賛か、さもなければ極端な罵倒に陥る傾向が多かった。思い入れの深さゆえの視野狭窄や、価値観の違いゆえの近視眼的な評定が日に付いた。これに対して著者は、山本鼎の農民美術運動や自由画教育、宮澤賢治の活動にも目配りする(山本鼎の台湾への関心を取り上げたのは、著者の大きな功績。なお細部にわたるが、柳には山本の運動への批判的言辞があったはずだ)。また民藝の近傍にありながらやがて離反していった三宅忠一、富本憲吉らも的確に評価する。日本民藝協会が従来忌避してきた史実の掘り起こしには、若き柳がラスキンやウィリアム・モリスから蒙った影響を、後年に自ら矮小化した経緯も含まれる。河井寛次郎やバーナード・リーチと柳との関係の事実探索にも、著者は美談に留まらぬ掘り下げを辞さない。

柳思想の国際的射程を評定する第3の補助線は、ブルーノ・タウト、シャルロット・ペリアンらとの交流を跡付けることで得られた。ここには1930年代後半の世相のなかでの、西洋のモダニズムと、日本側の新伝統主義との競合が探られる。生粋の日本的伝統に関する言説が、欧米側からの原始主義や東洋趣味への期待と、日本側の国粹意識の高揚との合金であり、近代の再発明であったことが立証される。柳の説く民藝の理想、すなわち名もなき職人による無心の美、簡素で健康な美の追求が、大政翼賛体制下、統制経済のもとで機能主義と容易に結びつく傾向を帯び、柳がその時流に便乗したことも、否定しがたい。とともに、民藝を山脇巖や剣持勇らと交差させる試みからは、戦後のジャパニーズ・モダンへと派生するデザイン界の動向への視野も開かれ、長男・柳宗理の出発点も解明される。

著者の探索はこのように狭義の民藝にはとどまらず、その周辺にも周到な目配せが行き届き、日本近代の工藝史に習熟していない一般の欧米人読者にも理解可能な平易な概説が、最新の研究成果への手抜かりない言及と釣り合って、今後の基本書たるに相応しい確たる達成度を示している。これだけの広がりある領域を破綻なく踏査し、論理的にも整合性ある脈絡を見失うことなく、緊張感ある記述と、具体的な指摘によって描ききった力量は、賞賛に値する。そのことを前提としたうえで、評者としての見解を以下に述べてみたい。

柳の介入がソウルの光化門を破壊から救うに何がしかの貢献をなしたことは美談として語られるが、その柳の態度は、光化門を朝鮮女性に見立て、自分を日本人男性として優位に置くという、典型的な植民地的優位のうえに築かれていた。朝鮮民族美術館の設置に関しても、柳の亡き父・楢悦が海軍の高官であった背景は無視できまい。そこに適切にも著者は、近代日本人男性の植民地主義的性癖を指摘する。とともに、宗悦の活動資金は、当時その多くを声楽家たる妻・兼子の独唱会に負っていた。宗悦は日本の教育者が半島で欧米美術模倣の美術教育を施すことに激怒したが、皮肉にも兼子が半島で絶賛を博したのは、西洋音楽の独唱によってだった。著者の指摘に沿って、この矛盾に注目するならば、宗悦の朝鮮民族美術賞賛の裏に、宗悦の家庭内における兼子に対する劣勢の、心理的代償行為を読むのも無理ではなかろう。民藝に内在するオリエンタリズムを、ジェンダー理論により解剖するならば、兼子の「内助の功」の実態に迫る余地が、なお残っているようだ。

だが、柳を植民地主義者と規定するだけでは、著者の意図する民藝批判としては、なお不十分だろう。当時は欧米を含め、植民地による啓蒙は文明化の使命として肯定的に認識されていた。もちろんそのことは、柳の思想的限界を弁明する正当な理由とはなりえまい。だが同時に、植民地を絶対悪とする現在の視点から、柳をはじめとする当時の知識人を糾弾しても、それは現在の価値観による一方的断罪以上の洞察とはなりえない。『改造』に掲載された柳の朝鮮論説がいかなる検閲を受けたか、伏字だらけの掲載誌を手にとり確認するだけの労は推奨されよう。そのうえで柳の論法が、同時代の欧米の植民地主義者と、いかなる対比を描いていたのかに迫る、緻密な理論的考察が要請されることとなる。

ここで著者は日華事変期以降の、柳の沖縄や台湾への関与を取り上げ、そこに極端な日本中心主義的言辞が顕著に現れることを問題とする。沖縄方言論争で、柳は沖縄の言語の保存を訴えた。だがそれは、柳が沖縄の文化や言語に、本土では失われた原日本性を認めたためでしかなかった。柳は沖縄人を公民化されるべき進化過程にある日本人と見做し、アイヌ民族は日本人の祖先たる新石器時代人と同定する。こうした柳の人種観は、当時の人類学的知見に依存していた。さらに著者は、代替資源と目された台湾の竹細工に柳が関心をしめした点に注目する一方、公民化路線に合致しない玩具などが消滅に瀕したことを指摘し、柳の選択と当時の植民地政策との親近性を主張する。これらの指摘は、個別を一般に還元し、状況証拠によって意識されざる共犯性を立証しようとする傾向を帯びる。これは、英米法の共謀罪の規定に、脱植民地主義政治学が接木されて生まれた近年の知的流行であり、賛否も分かるところだろう。たがそうした論法に実証の手続きからの逸脱を指摘することは、かえって政治的に不正な態度として糾弾されかねない。本質主義批判、国家主義批判は、英語圏での著書の出版のためには、不可避な価値観の表明でもあっただろう。とはいえ論ずる対象を断罪することで、論者の正当性の証とする姿勢は、明日は我が身に降りかかる。琉球や台湾そしてアイヌが、論者の柳への批判の正当性を証拠だてるために必要な犠牲者、論述上の便宜的

口実へと切り詰められてしまうなら、遺憾だろう。

評者としてはむしろ「民俗台湾論争」への洞察に、本書の可能性を認めたい。公民化政策が提唱した「郷土愛」や「郷土意識」といった地元主義は、結果的には地元の民族意識に働きかけ、戦後の台湾の民俗学研究的基礎をなした。だが結果は手段を正当化しないだろうし、逆に不当な手段によって達成されたからといって、結果をも否認するのは筋違いだろう。柳の現地への介入は、そうした二重拘束のジレンマから決して自由ではありえない。柳のみならず、柳に情報を提供した金関丈夫らが置かれたこの状況を「日本帝国主義」と呼ぶのは容易だろう。しかし一切を「帝国主義」と括って評定し、能事畢れりとするのでは「防火のために火を用い、殺傷を避けるために刃物を使う」(p. 181) 愚とさして変わるまい。

柳の民藝にも顕著な民俗学的視点が孕む問題には、土着の文化に価値付けをするのは植民者の特権あり、地元の住民は自らの営みの価値に無自覚だ、とする非対称な優劣意識を表明して憚らぬ傲慢さが指摘される。西欧的価値にたいする反措定、代替価値の提言であったはずの民藝もまた、その轍を免れなかった。東洋の盟主としての日本に価値裁定者の地位を与え、その属領や併合領土、傀儡政権支配地を、評価のための受身の対象へと切り詰める行為は、西欧植民地主義の複製への加担であるのみならず、この入れ子構造が東洋各地に、より深刻な心理的傷害を負わせたことを、本書は正面から指摘する。東洋の政治的劣位への被害者意識が、美的優位という補償幻想を育んだことも、柄谷行人の指摘に待つまでもない。ここに著者は典型的な「オリエンタリズム」の構図の極東的派生版を見て取る。だが評者としては、いまや手垢のついたこの理論的枠組みを越える着想が、民藝の批判的研究から現れることを、望蜀ながら期待したい。最後にその予備的素描を試みたい。

1952年、英国ダーティントンでの柳らの講演が大きな反響を呼び、*Unknown Craftsman* という英文著作に結実したことは、広く知られている。その受容の様を著者は対抗文化運動の一環として位置づけ、そこに、西欧との接触によって極東の近代に育まれた柳の雑種的思想が、正統な東洋思想という資格を付与されてしまう歴史の虚構の顛末を見据える。雑種(hybrid)も流行の用語だが、そもそも柳の思想は、西欧に通用する論理によって架空の東洋を理論構築し、そこにあてはまる素材を選んで編集するという特性を、『工藝』誌以来備えていたはずだ。そこには理論という知性主義への懐疑を宿した神秘主義思想家が、信条とする直観主義に、戦後、鈴木大拙経由の仏教思想を接木して、論理的思考の限界を越えようとした軌跡も顕著に見て取れる。この「理論」性が西欧にあって、一方で全面拒絶、他方では陶酔的受容、という対立する反応を招く原因となったはずだ。およそ西欧社会で通用する東洋思想には、西欧的合理思考の超克が、権利問題として求められ、言語表現を拒絶する神秘化が不可避に付きまとうことも、ひとり柳に限ったことではない。その中で著者は、熟練・没我の手仕事には、Michael Polanyi の言う「暗黙の知」が宿されているとの Peter Dormer の見解を引く。ここには、柳が分析を放棄した無心、無名、他力道の内実を、視覚文化、言語文化との対比において探る契機が提供されているはずだ。それは危険な誘惑を孕んだ「欲望の曖昧な対象」(p. 240) だが、その解明が著者の次なる課題となるだろう。

稲賀繁美 (国際日本文化研究センター教授)

## 編集後記

諸般の事情により遅延していた第26号をようやくお届けできる運びとなりました。このように会報が遅れたことを深くお詫び申し上げる次第です。

表紙と扉にある写真は、1880年代にフランスでつくられた舞踏会用ドレスです。この効果的にあしらわれた芭蕉あるいは羊歯模様は、ビングの『芸術の日本』(1890年4月24日号)、そして鳥文斎栄之(1756-1829)による「青楼芸者撰」中の「いつとみ」の帯に、似通った図案がみられるそうです。なお東京国立博物館所蔵の「いつとみ」は、パリの宝石商アンリ・ヴェヴェールから松方幸次郎が購入したのですが、そもそもヴェヴェールは林忠正から購入したのではないかと指摘されています。この興味深い日欧の往還については、京都服飾文化研究財団編集による『モードのジャポニスム』(1994)の166ページをご参照ください。これら図版の使用を快諾して下さった京都服飾文化研究財団には、厚くお礼申し上げます。

御覧のように、今号は、研究論文、研究ノート、特別寄稿、書評、展覧会評、そして展覧会案内に文献紹介と、実に充実した内容となりました。特別にご寄稿をお願いした林洋子氏および村井則子氏、各執筆者諸氏、論文査読委員会の皆様、実行委員の小泉順也氏と嶋田華子氏、そして助成をいただいた石橋財団に対して、心よりお礼を申し上げます。いうまでもなく、このように多岐にわたり、かつ質の高い内容の会報を発行できましたのは、会員の皆様方のお力の賜物です。引き続き会員諸氏の活発なご活動とご支援を最後に改めてお願いして、編集後記とさせていただきます。

(橋本順光・鈴木禎宏)

### ジャポニスム研究 第26号

Studies in Japonisme, No. 26

(『ジャポネズリー研究学会会報』後継誌)

編集 鈴木禎宏(事務局長・会報編集担当兼任)

橋本順光(事務局・会報編集担当兼任)

論文査読 論文査読委員会

発行 ジャポニスム学会

東京都新宿区高田馬場4-4-19

国際文献印刷社内事務センター 〒169-0075

*Society for the Study of Japonisme*

*c/o International Academic Printing Co. Ltd.*

*4-4-19 Takadanobaba, Shijuku-ku, Tokyo 169-0075*

TEL (03) 5389-6243 FAX (03) 3368-2822

E-mail [ssj-post@bunken.co.jp](mailto:ssj-post@bunken.co.jp)

2007年1月31日

制作 (株)国際文献印刷社

*Printed in Japan*, ©2007 Society for the Study of Japonisme

学会HPアドレス <http://wwwsoc.nii.ac.jp/japonism/>

郵便振込 振込先 口座番号 00100-7-558061

ジャポニスム学会